

長野県・松本山岳地帯で行われる海の祭り

～神話の世界に遡る起源～

日本不動産研究所 松本支所
不動産鑑定士 宮原 一繁

松本市を中心とするエリアには、海に関する地名がみられます。例えば、新島々・下島・島内・島立・上海渡・竜島等です。また旧穂高町（現安曇野市穂高）にある穂高神社で行われる「御船祭り」は海に絡んだ祭りです。

これらの事柄を掘り下げてみたいと思います。



「穂高神社」

1. 阿曇氏（安曇氏とも表記する）

海人族として知られる有力氏族で、発祥地は、現在の福岡市東部とされます。後に最初の本拠地である北九州の志賀島一帯から離れて全国に移住しました。この移住の原因として、磐井の乱や白村江の戦いでの安曇比羅夫の戦死が関係しているとの説があります。安曇は海人津見（あまつみ）が転訛し、津見（つみ）は「住み」を意味し、その説だと安曇族は「海に住む人」を示しています。

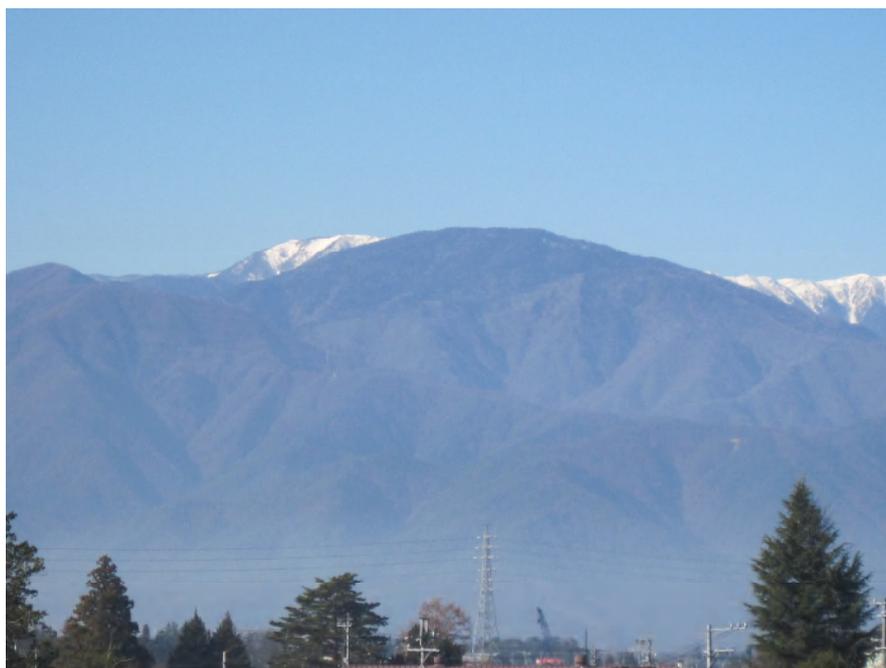


「阿曇比羅夫之像」

標高 3190mの奥穂高岳山頂に嶺宮のある穂高神社は、この地の安曇氏が祖神を祀った古社で、中殿（主祭神）に「穂高見命」、左殿に「綿津見命」など海神を祀っています。磐井の乱により、本拠地（北九州の志賀村）を追われた安曇族は全国に散りましたが、その一部（主な部分との説もある）が日本海を北上し、交易関係にあった越後の糸魚川にたどり着き、そこから日本海に流れ込む姫川をさかのぼり、信濃の国の安曇郡（長野県安曇野市）に住み着いたと云われています。

2. 穂高神社

穂高神社は、日本アルプスの総鎮守とされ、「安曇野」地域のほぼ中央に位置し、奥宮は上高地にあります。



「奥穂高・上高地方面を望む」

安曇族は古事記にも登場し、神話では伊邪那岐の子である綿津見神、さらにその子の穂高見神に連なる一族とされています。北アルプスの穂高岳は穂高見神の降り給う地とされ、それを祀る穂高神社が建立されました。その本宮は穂高集落にあり、奥宮は穂高岳の麓＝上高地（神降地）の明神池のほとりにあります。さらには、奥穂高岳山頂に峰宮が祀られています。

穂高神社の、本宮では9月下旬に、奥宮では10月上旬に、それぞれ船を用いた祭事が行われます。山国信州（神州）で、海にまつわる船のお祭りが行われることは、海洋民族とされる安曇族と関係があると考えられます。穂高神社の例大祭は舟の形をした山車を引き回して勇壮にぶつけあうもので「御船祭り」と呼ばれています。



「神船」

穂高神社の祭神のひとつである綿津見神は海の神で、記紀神話では伊邪那岐神の子とされています。穂高見神はその子で、安曇族の先祖とされる神です。遡っていくと日本の国を生んだ神話の世界で伊邪那岐に行き着きます。

山岳地帯にある海の地名・山国での御船祭りの存在が、古代から神話の世界にまで遡っていきます。